

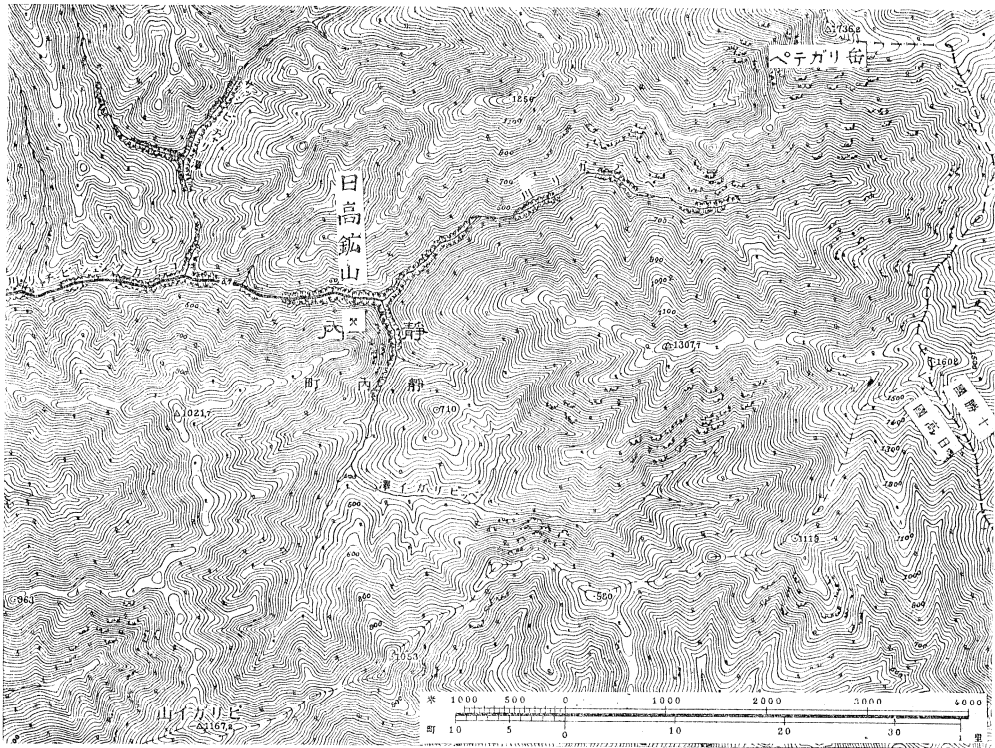
日高支庁管内静内郡  
**日高鑛山電氣探查豫察報告**

山口久之助<sup>1)</sup> 小田切敏夫<sup>2)</sup>

**1 緒 言**

昭和 27 年 8 月 1 日より 11 日間に亘り、日高鉦山の電氣探查予察を行つたので、茲にその概要を報告する。

今回試みた電氣探查は、日高鉦山の鉦床が電氣探查法に適する鉦床であるかどうかを確かめ、



第 9 圖 日高鑛山近傍地形圖

1) 2) 前掲

若し適合するものであれば、本格的探査を実施する区域・探査方法・所要工程等を決定する目的でこれを行つた。

## 2 概 況

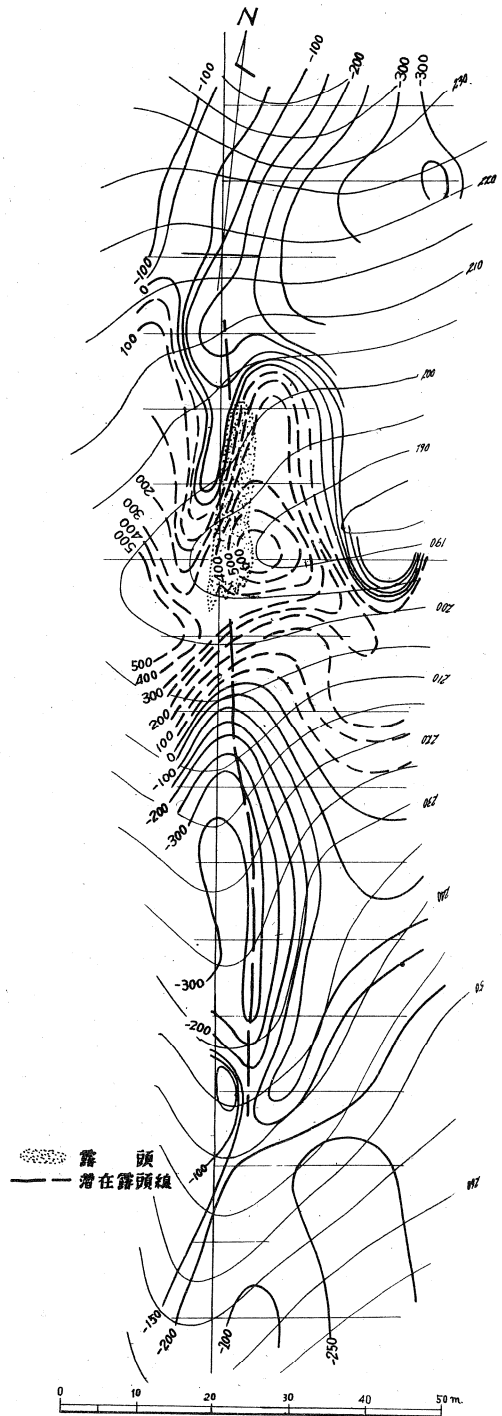
日高鉱山は日高静内町大字奥高見に在り、日高背陵山脈の雄峰ペテガリ岳の南西約5 km, シベチャリ川の源流ペテガリ沢とベッピリガイ沢との合流点より数100 m 下流の左岸山腹に位置する(第9図参照)。

鉱山に至るには、日高線本桐駅にて下車し、歌笛を経てケリマイ川を溯行し、三石・浦河・静内の郡界尾根に登り、イベツ沢を下つてシベチャリ川本流に出、これを溯行する。ケリマイ川源流に至る迄はトラックが入れるが、そこから鉱山迄約20 kmの間は山径を辿る。ケリマイ川源流と、イベツ沢、シベチャリ川の出合には夫々中継小屋が設けられ、静内町若しくは浦河町より入山すれば、途中この小屋に各1泊しなければならない。

鉱山附近の地質は、一般走向 NNW—SSE で西に急傾斜する日高系の粘板岩の累層とこの累層の一般走向に沿つて帯域的に進入した輝緑岩の岩脈・岩床等で構成されている。粘板岩の累層は主として石墨質であるが、砂質乃至珪質のものもあり、黝色硬砂岩を挟んでいる。輝緑岩は一般に緑泥石化している。

現在判明している鉱床は、粘板岩と輝緑岩との接触部に沿つて胚胎した動力変成型の鉱床であつて、走向北微西—南微東を示し殆んど直立しているもの1条である。これの脈幅は、中石を含めて約7 m あり、中石を除いて3 m 弱である。

鉱石は磁硫鉄鉱と閃亜鉛鉱とを主とし、これに黄銅鉱を伴つている。今回の調査でこの露頭を中心に剝土したところ、鍾先延長約25 m にしてその



第10圖 自然電位分布圖

両端は母岩中に潜入していることが判明した。露頭では磁硫鉄鉱の一部が酸化して褐鉄鉱となり、又一部には白鉄鉱となつている。

### 3 電気探査

露頭を中心とし、その走向線上100 mの間で、鉱床の分極による自然電位を測定して、既知露頭に分極電位と潜在露頭に分極電位とを対比連結し、露頭線の方向を追求した。即ち測線は予想露頭線上10 m間隔とし、測点を2.5 m間隔にとり、基準電極を露頭から約200 mの距離に接地し、各測点の自然電位を測定して等電位線図を作図した。第10図にこれを掲げる。

今図を見るに、露頭線に沿つて電位の正負の地帯が併走し、鉱床の頂部が強力に分極していることを示している。而して分極電位差は、露頭附近では最大1,000 mVにも達しているが、露頭線から遠避るに従い急激に勢力が低下している。これは分極現象が鉱床頂部に旺盛であつて、鉱床下部に及んでいないことを示すものと考えられる。従つて鉱床が母岩中深くに包蔵されていると、その検出は困難であると予想される。今回実測した電位分布から、鉱床の潜在露頭線の延長は、略々南北の走向をとり、露頭より南へ約70 m北へ約30 mに及んでいると判定される。

### 4 結 論

(1) 日高鉱山の鉱床は、日高系の粘板岩とこれに岩脈・岩床状に侵入した輝緑岩との接触部に沿つて胚胎する動力変成型の鉱床であつて、鉱石は主として磁硫鉄鉱と閃亜鉛鉱とであつて、これに部分的に黄銅鉱を伴っている。

(2) 鉱床の分極現象は極めて旺盛であつて、電気探査法（自然電位法）によつて潜在露頭を検出することは可能と認められる。

(3) 今次の予察によつて、既知鉱床の走向延長は約100 m迄追跡された。

(4) 今後電気探査を実施する場所は、既知露頭の南粘先方向で、閃板岩と輝緑岩との接触帯を対象とする予定である。